



医療法人山陽会 長門一ノ宮病院
4階病棟便り 「だんだん」第4号
山口県下関市形山みどり町17番35号
TEL:083-256-2011
FAX:083-256-9004
発行責任者 稲野 秀
令和7年1月1日発行
<http://www.nagatoichinomiya-hp.com/>



「4階病棟のルールブック」のご紹介

4階病棟師長 上利 浩史

社会で暮らしている人々が、安心・安全に生活していくには、必ずルールというものが存在します。当院に入院してくる子どもたちは、特性や様々な理由から、挨拶ができない、時間が守れない、整理整頓ができない、人との距離がうまくとれない、気持ちを言葉にできず暴れてしまう、我慢ができないといった状態にあります。そして、日常生活での基本的なルールを知らない、あるいはルールが守れないことが多いです。



そんな子どもたちに、入院中に、みんなが安心、安全、快適に過ごす為にはどのような行動やルールを守っていけば良いかを学んでもらい、退院したあとでも学んだルールを役に立ててもらいたいと思い、病棟のルールブックを作成し、活用しています。

子どもたちが入院すると、子ども一人一人に、ルールブックが1冊、貸し出され、入院中は子どもたちが自分で管理します。

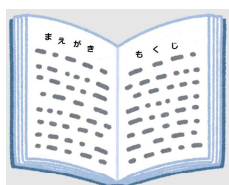
今回はこの「長門一ノ宮病院4階病棟のルールブック」を簡単に紹介したいと思います。ルールブックの「まえがき」には、以下のような内容が書かれています。

長門一ノ宮病院 4階病棟は、あなたたちの治療をする場所です。
みなさん、いろいろな理由で入院をしてきているとは思いますが、ここではみんなが安心・安全にすごすために、決められたルールがあります。
「ルールを知らなかった」は、ルールを守らなくてもいい理由にはなりません。
また、長門一ノ宮病院 4階病棟でみんなが安心・安全にすごすことができない行動をした場合は、このルールブックに書いてないことであったとしても、注意と指導の対象になります。
基本的には病院での安心・安全な生活をするためのルールですが、退院をした後も役に立つと思います。
ひとりひとりがルールを守って、ここにいる全員が安心・安全だと思える生活をしましょう。

「まえがき」のあと、項目毎のルールがわかりやすく、簡潔に書いてあります。漢字にはカナをふり、子どもたちがルールを理解しやすいように工夫しています。

また、子ども一人一人にルールブックを全項目、スタッフが読んで説明しています。

病棟生活でわからないことや困ったことがあった時は、すぐにスタッフへ相談するように説明し、ルールブックを大切に扱うことを伝えます。ルールブックを手渡したら、退院に向けて、毎日の行動の振り返り、ルールチェックが始まります。



ルールブックは、子どもたちの様子や病棟の状況を見て、何度も内容を改訂し、新たな項目を追加してきました。今後も子どもたちが少しでもルールを知り、ルールを守ることが大切だと理解して、社会の中で良い行動が増えるように、ルールブックもバージョンアップさせていきます。

心理検査について

4階病棟担当公認心理師 稲野 碧

心理検査ってどんなもの？

心理検査の種類は大きく3つに分けることができます。「発達・知能を測る検査」「脳の機能を測る検査」「心の状態を測る検査」です。

今回は3つのうち、医療現場や教育相談、就学相談会などで目にする機会が多いかと思われる「発達・知能を測る検査」について説明します。

発達・知能を測る検査の代表例としては、ウェクスラー式知能検査(WISC-IVなど)、K-ABC II、田中ビネー知能検査Vなどがあります。



こうした心理検査においてIQは明確な数値で示されてしまうので、どんな人でも結果を知るとネガティブ・ポジティブに関わらず様々な感情がわき起こります。そう思うのは自然なことで、それは本人だけでなく親御さんも同じです。ただ、数値だけに注目して一喜一憂してしまうのは、大変もったいないことだと思います。

心理検査はIQの数値によるレッテル貼りや能力の優劣の測定、あるいは才能の保証、そういったことを測定するものではありません。また、心理検査の数値は診断を確定させるものでもありません。

心理検査とは、検査を受けた本人へのより良い支援の一助になるツールのひとつなのです。

知能検査の結果の見方

知能検査の結果で表されるIQとは、端的に例えると「知能の位置情報」です。

「同じ年齢の人全体の中で、検査を受けた本人の知能が、現在どの位置にあるか」ということを数値で示しています。このIQの数値は、同じ年齢の人全体の平均(真ん中の位置)が100になるように調整されています。

よく誤解されやすいのですが、IQの数値そのものに良し悪しの価値概念はありません。

IQの数値が表すものは、頭の良さ・質ではなく、現在の位置です。

IQの数値は努力で伸びるものではありませんが、この先の将来ずっと同じというわけでもありません。同じ検査を何回か受けると、ある程度の幅の中でIQの数値は動きます。なぜなら、検査を受けた時の本人のコンディションが影響するからです。緊張で能力が発揮しきれなかったり、何かしらの理由で集中できなかったり、理由は様々です。この揺れ幅を「信頼区間」といいます。

また、同じ年齢の人との比較を「個人間差」といいます。それとは別に、検査を受けた本人の中での得意・不得意を「個人内差」といいます。

WISC-IV (ウェクスラー式知能検査) を例にして、結果の意味を解説していきます。
WISC-IVの結果は、おおよそ下の【図1】のように示されます。
IQは「合成得点」という言葉で示されます。

<検査結果>	合成得点	90%信頼区間
全検査IQ	99	94-104
言語理解	115	106-121
知覚推理	98	91-105
ワーキングメモリー	91	85-99
処理速度	73	69-85

【図1:WISC-IVの架空事例】

例えば【図1】の、言語理解という能力の項目に注目すると「合成得点が115」で、「90%の信頼区間」のとき、信頼区間は「106-121」という検査結果が記載されています。
これは、次のような意味として読み取ることができます。

今回の検査で測定した言語理解の能力の位置は、同年代の人と比較したとき、115という位置にありました。
個人の能力としては、言語理解は最も本人の強みとなる能力と言えるでしょう。
ただし、本人のコンディションによっては、115という数値は前後します。
本人が仮に同じ検査を100回した場合、100回中90回(90%)は、106以上121以下の値で変動します。

支援においては、他者との見比べではなく「この子は作業に時間がかかるようだけれど、耳で聞いた指示の通りは良いみたいだな」といったふうに、本人の中での得意・不得意な能力に注目すると、支援すべきポイントが把握しやすくなります。

また、数値だけでなく、実際の日常生活での困り感の情報や、検査時の態度や様子も合わせることで、本人に対する支援の在り方がさらに見やすくなります。

残念ながら、心理検査の詳細を説明するとなると、どうしてもこの記事の文字数では書き切ることができません。

ですから、「わからない専門用語がある」「得意・不得意だけでなく具体的な対応を知りたい」「支援するときどんな工夫をすれば良いのかわからない」等、疑問や不安を解消するための質問があれば、遠慮無く我々専門家にお伝えください。



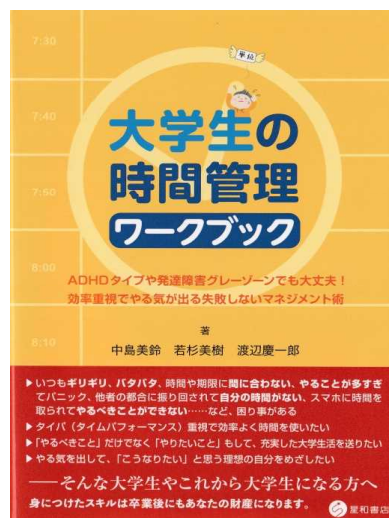
書籍紹介

「大学生の時間管理ワークブック」 中島 美鈴・若杉 美樹・渡辺 慶一郎 著 星和書店

発達障害をもつ人の中で、時間管理が難しい人は多いのではないのでしょうか。時間感覚がうまくつかめず、大幅に時間に遅れてしまったり、逆に時間を持て余してしまったり…。時間や期限に間に合わない。スマホに時間を取られて、しないといけないことができない。そして、信用を無くしたり、自分に嫌気がさしてしまう…。

この本は特性を持った人が大学生になった時に、どんな風に時間管理をすれば良いかを具体的に教えてくれます。どうして時間がうまく管理できないのかをわかりやすく「豆知識」で説明してあったり、利用できる支援などの情報を「耳寄り情報」で書いてあったり、大学生だけでなく高校生や中学生、もちろん大人にも応用できるところがたくさんあります。

この本に書いてあることが、全ての人にうまくいくというわけではないかもしれませんが、一つのやり方として、取り組んでみていいのではないのでしょうか？



「15歳までに始めたい！発達障害の子のライフスキル・トレーニング」 梅永 雄二 著 講談社

子どもは多くの場合、小・中学校に通っている間は保護者や教師、まわりの大人のサポートを受けられます。しかし、中学を卒業すると、ひとりで活動する事が求められる機会が一気に増えます。そのとき、生活面のスキルが不足していると、さまざまな問題が起こります。

この本は、発達障害の子が15歳までには身につけ始めておきたいライフスキルを、10種類に分類しています。そしてそれぞれのスキルに対して、「よくある悩み」「悩みの背景」「トレーニングの実践例」をあげ、どうトレーニングしていけば良いかをわかりやすくまとめています。

発達障害の特性は似ていても、子ども達は一人一人違います。この本は、子ども達の「得意」をのばし、「苦手」をサポートする手助けになるのではないのでしょうか。



(紹介者 稲野 靖枝)

<編集後記>

新型コロナウイルスが5類となってからしばらく経ち、当院でも徐々に制限が緩和されつつあります。しかしながら依然として感染力は強いままですので、患者様やご家族には何かとご不便をおかけすることもあるかもしれませんが、インフルエンザなどの他の感染症と併せて十分な対策を行っていきたいと思います。

さて、今号で「だんだん」は4回目の発行となりました。今回は児童病棟で使用・実施しているルールブックや心理検査の紹介をしています。紹介した内容はほんの一部になりますが、ご家族や入院を考慮しておられる方の参考になれば幸いです。また書籍紹介は2冊とも生活していく上で必要なスキルについて書かれた本になっています。障害のあるなしに限らず役立つ内容もあると思いますので興味のある方は読んでみてはいかがでしょうか。(S.T.)

